

118年の船舶建造に幕 JMUは修繕事業に特化し継続へ

(1頁から続く)

舞鶴最大の基幹産業

造船業を主力とした舞鶴海軍工廠は、開設以来、技術の優秀性を誇り、駆逐艦、水雷艇など、数多くの艦艇を建造してきました。第2次世界大戦後は、GHQ(連合国軍総司令部)等の統制を受ける中、復員艦船や商船の修理などが行われていた時期もありましたが、昭和27(1952)年に新造船工事が許可され、船の建造事業が飯野産業(株)舞鶴造船所として再開されました。

そして、同28年4月に姉妹会社飯野海運(株)の貨物船長島丸(5,650ト)を起工。同28年11月には飯野重工業(株)に名称変更。さらに、景気に左右されながら、同38年4月には日立造船(株)の系列下に入り舞鶴重工業(株)となりました。その後も造船業の世界的なうねりの中で、同46年4月に日立造船(株)と合併し、同社舞鶴工場へ体制変更。また、平成14(2002)年にはユニバーサル造船(株)舞鶴事業所に。さらに、同25年1月からは現在のジャパンマリンユナイテッド(株)舞鶴事業所へと経営母体は移り変わりました。

しかし、名称や事業内容に変遷があったものの、造船業は本市最大の基幹産業であり続け、最盛期には、3千人以上の従業員を有し、関連する企業による鉄工団地が長浜地区で6社、小倉地区でも8社が立地する一方、昭和48年には関係企業が、京阪神地域の企業も含めると62社に及び、同49年には「日立造船舞鶴事業協同組合(現:JMU舞鶴事業協同組合)」が結成されたと、記録に残っています。

商船建造からの撤退

造船業は、世界の好不況の荒波にさらされる中、国から多額の支援を受ける中国・韓国の造船会社は逐次強大になる一方、価格競争と相まって、民間企業である日本の造船界は保有する優れた技術力だけでは受注の確保が困難となり、近年は、全国の造船所で整理縮小が相次いでいま

した。

こういった中、JMUも「舞鶴事業所の構造改革」の名の下で、商船建造撤退が昨年2月3日公表され、当初の計画どおり、この5月末の最終船の引き渡しで造船事業は終了することになったものです。

既に、事業の終了にあたって、関連事業所14社で組織されていた「JMU舞鶴事業協同組合」が去る3月末に解散。また、従業員の配置転換や退職対応などを順次進められており、6月末で組織的にも「造船部門」は完全に廃止されることになっています。

5月26日最終船が引き渡し

最終船の引き渡しは、5月26日に行われ、午後1時半ごろにはJMUの岸壁を離れ、韓国・釜山港に向け出航して行きました。

JMUでは、これに先立つ午前10時20分から事業所内のK-4岸壁で、最終船となった82,400載貨重量トン型バラ積み運搬船の「命名式」を開催。命名者の多々見舞鶴市長らとともに、小西会頭も地元関係者として招かれ出席しました。

参加者約30人が見守る中、船名の読み上げや、くす玉、シャンパン割りなどが行われました。

なお、JMUによると、今回の貨物船は戦前から現在まで舞鶴で建造された474隻目でした。



命名式後の記念撮影(5月26日:JMU舞鶴事業所K-4岸壁)